

コミュニケーションをひろげるための学級環境づくり

今川陽子

1. はじめに

小学部3組（5・6年）の子どもたちは、言語として音声を表出できる児童は1名のみであり、他の児童は主に、注視、指さし、要求を伝える身振りなどで思いを伝えている。理解面では、こちらの言ったことや、文字などを理解することができる児童もいるが、なかなか伝わらない児童もいる。そこで、身ぶりや実物、写真、絵カードなどを一緒に提示し、VOCA等も活用しながら、お互いの思いが伝わるように工夫している。しかし、「子どもたちが一生懸命表現しているのに、わかってあげられない」「見通しがもてないためにスムーズな次の活動への移行が難しい」などの実態もあり充分な相互理解ができているとは言い難い。

2. 目的

本研究では、児童と教師のお互いの思いをより通じ合い、共感する喜びを感じるために、児童のコミュニケーション能力の実態を把握し、効果的な支援方法を考え、主な活動の場所となる教室の環境を整えることにより、変容を評価することを目的とした。

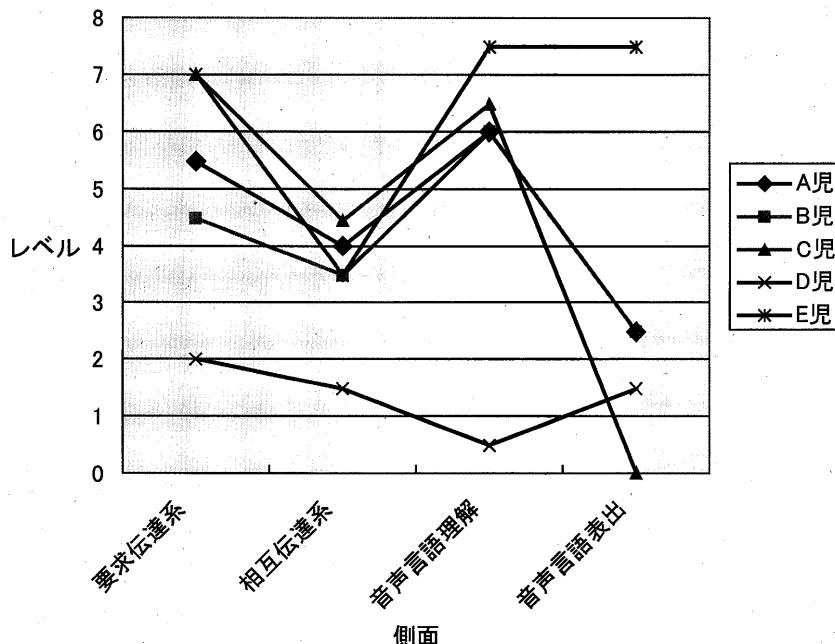
3. 実態把握とめざす姿

コミュニケーション発達アセスメント（Assessment Scale of Communication）（図I参照）と行動観察より（参考文献1）

要求 = 要求伝達系　相互 = 相互伝達系　理解 = 音声言語理解　表出 = 音声言語表出

ASC の結果 (発達レベル)		行動観察	めざす姿
A 児	要求	5.5 レベル (16ヶ月相当)	自ら「マママ」など発声することができる。 したいことではないと体をまるめて抵抗する。簡単なことばを理解し、表情を変化させて反応する。
	相互	4 レベル (12ヶ月相当)	
	理解	6 レベル (16ヶ月相当)	
	表出	2.5 レベル (7ヶ月相当)	
B 児	要求	4.5 レベル (13ヶ月相当)	特定のサインで要求があることを表したり、写真や絵を指さして知らせたりすることができますが、空腹、疲れなど上手く伝わらないと不機嫌になる。
	相互	3.5 レベル (10ヶ月相当)	
	理解	6 レベル (18ヶ月相当)	
	表出	2.5 レベル (7ヶ月相当)	
C 児	要求	7 レベル (21ヶ月相当)	理解していることばが多く、50音表を指さして単語を伝えることができる。しかし好きなことばを楽しんでいることが多く、伝達手段としての活用度は低い。
	相互	4.5 レベル (13ヶ月相当)	
	理解	6.5 レベル (19ヶ月相当)	
	表出	0 レベル (0ヶ月相当)	

D児	要求 相互 理解 表出	2レベル(6ヶ月相当) 1.5レベル(4ヶ月相当) 0.5レベル(1ヶ月相当) 1.5レベル(4ヶ月相当)	ことばかけによる反応や表情の変化が乏しく、相互理解が難しい。大人の手を引く、直接手を伸ばす、座り込むなどして思いを表現することができる。	表情や簡単な身ぶりで表現できる内容をもつ。
E児	要求 相互 理解 表出	7レベル(21ヶ月相当) 3.5レベル(10ヶ月相当) 7.5レベル(22ヶ月相当) 7.5レベル(22ヶ月相当)	音声言語をもち、ことばあそびを楽しむ。簡単な指示による行動も可能であるが、要求を伝えることばの範囲は狭く、他児への関心も少ない。	人とのかかわりを楽しみながら、自らかかわりあうことばを増やす。



図I 児童のコミュニケーション発達プロフィール

4. 手立てと実践

【①おはようビックマック】(表出)

ビックマックとはVOCAの一種で、大きなボタンを押すと録音された声が再生されるものである。登校時、教室の入り口に置き、子どもたちの方から「おはよう！」と発信することができる。発信するとみんなからの注目と「おはよう」という声が返ってくる喜びを感じることができる。

〔児童の反応〕 ○自ら何度も押しに行く児童。



○みんなからの声を受け取ると笑顔いっぱいになる児童。「おはよう！」と

【②いきたいところ・すきなことなあにカード】(表出・理解)

子どもから発信

教室の出入り口のホワイトボードに、いろいろな場所、好きなものの写真カードを並べ、自由に伝えることができるようとした。どの児童にも対応できるように種類を増やし、表出が困難な児童にも、次に行く場所のカードを目の前で見せてから移動するように配慮した。取り外すことで、目の前で1枚だけを注視しやすく、主に教室移動、排泄に行くときなど、今から行く場所がわかるように使用した。

〔児童の反応〕 ○教師の手を引いて連れて行き、指で指し示す児童。

○カードを見せて場所を知らせると、一人で行って用事を済ませ、帰っ

てくることができた児童。

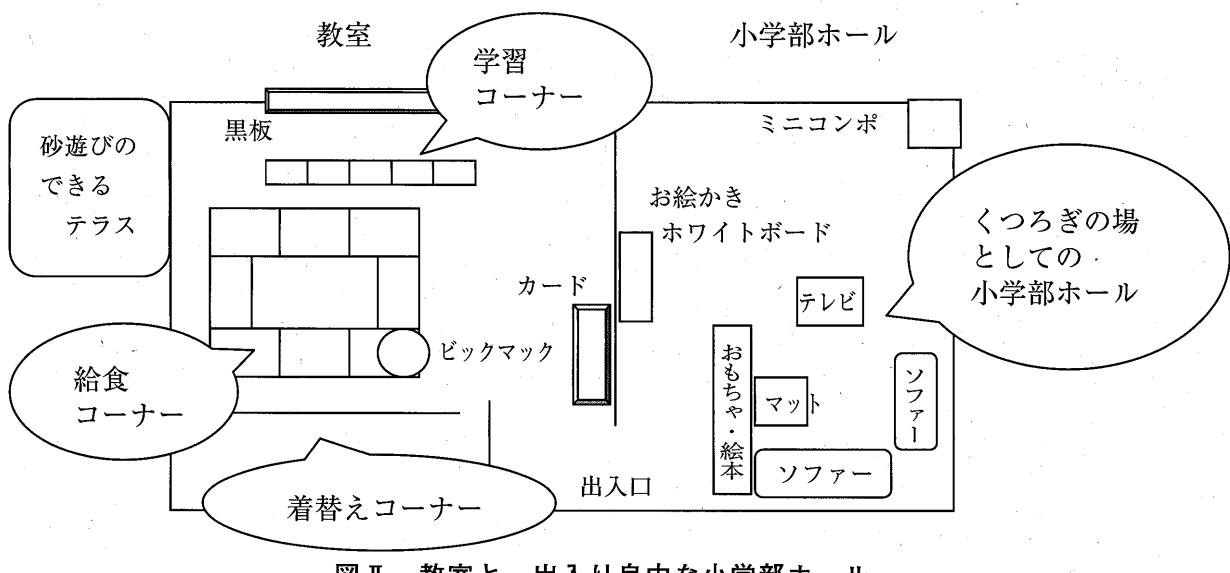
△持って見せに来たりするには至っていない。

△カードに慣れていない児童もあり、使用能力の差にも対応しなければならない。好きな「おやつ」カードから練習を始めた児童もいる。

【③身ぶりサインの使用】(表出・理解)

教師の側の言語による表現をよりわかりやすくするため、マカトン法を参考にし、補助手段として使用した。

【④わかりやすい活動の場所】(理解)



図Ⅱ 教室と、出入り自由な小学部ホール

【⑤「立つ」「座る」「はい」「いいえ」カード】(理解・表出)

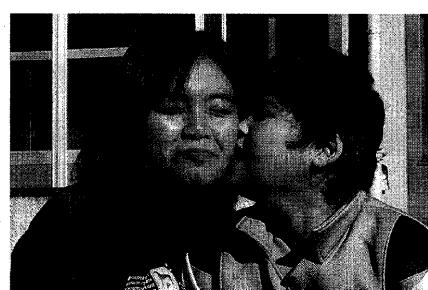
今どういう姿勢でいればいいのか、また、「はい」なのか「いいえ」なのか日常よく必要とすることであり、すぐ示すことができるよう掲示用と、体育館など教室以外の場所でも目や指で示すことができるよう、携帯用も作成した。

【⑥見通しをもつためのカード】(理解)

朝の一連の活動を1枚ずつのカードにし、取り組むことがわかるようにした。最初はボードに並べてはり、終わったら外すというタイプにしたが、リングでまとめて、終わったらめくっていくタイプのほうが、児童には簡単に持ち歩けて手軽なようだったので、まとめるタイプにしてある。おしまいになったら好きなことができる。

【⑦環境としての教師】(理解・表出)

目・声・笑顔をあわせるようにし、スキンシップを大切にするようにした。また、受け入れにくい行動についても、記録を細かくとり、背景をよく考えるようにした。



「スキンシップを大切に」

5. 結果

	使った手段	具体的な子どもの様子
A児	①④⑦	・頬と頬をあわせてスキンシップ行動が増え、穏やかに過ごせることが多くなった。 ・遊び時間、自由に好きなところへ遊びに行き、楽しんでくることができるようになった。

		<ul style="list-style-type: none"> ・「マママ」「ヤヤ」など児童の声をそのまま返すことによって、笑顔で声の掛け合いをすることが増えた。
B 児	①②③④ ⑦	<ul style="list-style-type: none"> ・くつろぎの場所が近くにあるため、学習の時間内でも自由にソファーに座り、気持ちを落ち着けることができるようになった。
C 児	①②③⑤ ⑥⑦	<ul style="list-style-type: none"> ・カードの場所まで教師の手を引いて連れて行き、行きたいところを伝えることができる。 ・朝の活動手順カードを見ながら、順番に自分でカードをめくっていき、終わったことを納得しながら次のことをできるようになった。
D 児	①②⑦	<ul style="list-style-type: none"> ・表情が豊かになり、笑顔や声を出すことが多くなった。 ・教師より先に歩いて、行けるところがいくつも出てきた。
E 児	④⑤⑦	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちの名前を覚え、お便りを正確に配ったり、名前呼びで呼ばれた友だちの頭を間違えずに触ったりすることができるようになった。 ・教師とのスキンシップやことばあそびが増え、手あそびもいくつも覚えることができた。

6. 考察と今後の課題

カード類は、教師があつたらいいのではと思い、いろいろ用意したが、カードを使用する能力にも個人差があり、すべての児童にとって有効であったわけではない。しかし、カード類は音声言語がなくてもコミュニケーション手段として使えるため、お互いの思いをスムーズに伝えるためにもより有効な生かし方を考えていくことが今後の課題である。

身ぶりサインは、目でも見ることができ補助にもなったと思うが、今回の期間で児童が自ら使うことはなかった。教師が伝えたいことばは指示的なものが多く、児童が伝えたいものとくい違っていたためと考えられる。そこで、自ら使えるようになるためには、児童が一番伝えたいことばを選び、教師も一緒に行うなどの方法を今後考えていかなければならない。

学級環境におけるコミュニケーション手段の、ほんのひとかけらを実践し一歩を踏み出すことができた。課題を追究しつつ、有効に使用できるための方法を探っていきたい。コミュニケーション発達アセスメントの結果についても、一人一人より詳しく分析し、課題に対して具体的なプログラムを組み、達成を目指していくことができる。

今回の実践により、児童のよりよい変容はいくつか見られたものの、はじめの目標が達成されたわけではない。まだ児童の思いをしっかり受け止めているとは言えず、もどかしい思いでいる。教師の存在が大きいことは確実である。わかりあう喜びから笑顔を増やしたいとの思いで研究を始めた。お互いへの信頼によって落ち着いて行動できることも増えるであろう。これからも児童との気持ちの共感を目指していきたい。

<参考文献>

- 1 「コミュニケーションの発達と指導プログラム」
—発達に遅れをもつ乳幼児のために—

長崎 勤・小野里美帆=共著

日本文化科学社

- 2 「肢体不自由児のコミュニケーションの指導」

平成4年 文部省